

実践報告 (Report)

コメントと学習意欲の関わり

The relation of comments and desire to learn

松原 道晴
Michiharu Matsubara*

キーワード：コメント，学習意欲，小学校，大学

Key words: comment, desire to learn, elementary school, university

1. はじめに

子どもたちは、回りの大人や友達から日々多くのコメントを受けている。それは、言葉がけであったり、作文や作品への評価・感想であったりする。コメントの発し方は、言葉・音声によるもの、文字などによるもの、言葉に合わせて態度や表情によるものが考えられる。その中では、言葉のコメントが多くを占めるとと思われる。友達や先生の言葉でうれしくなったり悲しい気持ちになったりすることも多い。

ここでは、文字によるコメントについて考えていきたい。文字のコメントは、後々まで残るものであり、言葉によるコメント以上に手間をかけ、気を遣っていると思われる。文字のコメントが子どもたちの学習にどのように関わっているのかを調べていく。

子どもたちの作文や作品に教師がコメントを書くことは普通に行ってきた。相山女学園附属小学校では日記指導をしており、毎朝提出された子どもたちの日記に、担任がコメントを書いて帰りに返却している。さらに20年ほど前からは、教師だけでなく子ども同士で作文や作品にコメントをしあう時間を授業に盛り込んできた。

(1) 日記のコメント

小学校では、日記指導を行っており、毎朝子どもたちが登校をすると、教卓に提出するようになっている。担任は、その日の授業の空時間や休み時間を使って、その提出された日記に目を通し、コメントを添えて、帰りまでに返却をする。係の児童が、各個人に配達をすると、ほとんどの子がすぐに日記帳を開き、担任の書いたコメントを読む様子を見ることができる。

昨年、この日記指導について職員で話し合った。子ども同士で日記交換をして、自分の書いた日記を友達に読んでもらい、また友達の日記を読ませてもらうようにする

*相山女学園大学附属小学校 教諭（教務主任）、相山女学園大学教育学部非常勤講師「理科の指導法」

ことになった。これまで、よほど仲の良い子同士でないと日記を読み合うことはなかったのですが、このことを子どもたちに話すと、「ええっ!」「なんでえ」などという声も聞かれた。しかし、日記交換を始めてみると、子どもたちは非常に楽しそうに交換（日記を読み合い、コメントをし合う）をしていた。その後、簡単なアンケートを取ってみると

- ・「日記を交換する（読み合う）ことをどう思うか?」という質問に対しては、

楽しい 58%, 少し楽しい 27%, 普通 8%, 少し楽しくない 8%, 楽しくない 0%

- ・「日記の交換を続けたいか?」という質問に対しての回答では、

続けたい 94%, どちらでも良い 6%, やめたい 0%

という様に非常に積極的な回答を得ることができた。

日記交換を続けたい子の理由の主なものは、表現は少しずつ違っているが自分のことを知ってもらえる、また友達のことがよく分かるという意見に集約される。中に「絆が深まる」「達成感がある」「友達の日記の良いところを見られる」「褒められてやる気が出る」「友達に見てもらおうので丁寧に書くようになる」などとも書かれていた。

(2) 友達からのコメント

「コメントタイム」は、20 年ほど前から始めた。一番初めは、作文の時間だった（写真 1）。作文の時間に、課題について自分の意見や感じたことを書いた後に、「コメントタイム」または「交換タイム」と称して、子ども同士で作文を交換して読み合う時間を設けた。作文の交換は隣同士で行ったり、席を立てて読んでもらいたい子のところまで出かけたり、交換してもらえる子を探して回ったりすることもある。時には、「日頃、話をあまりしていない子と交換しよう」と条件をつけたこともあった。作文の時間以外にも、国語の感想文を書いた後、道徳のカードを書いた後、書初めや硬筆習字の作品をまとめた後など、様々な場面で行ってきた。

理科や算数の導入に時間には、さらに、細かい設定をして、ノート交換をした（写真 2）。まず小さい子から単元の学習内容についての質問を受けたという設定をつくる。本人がその質問に自分の知っている範囲で答えるようにノートに文や図を用いて説明を書く。その後、席を立てて 2 人が向き合った形で、ジャンケンをする。ジャンケンに勝った子が小さい子役になって、お姉さん役の子に質問をする。その後ノートを交換してコメントし合う。

交換して友達の作文や説明（作品）を読んだあと（見たあと）、コメントを書く。コメントの内容は、「その作文や説明（作品）の良いところを見つけて、コメントしよう」「『ここを、こうするともっとよくなるよ』というような助言も書けるといいね」など、声かけを行った後に「コメントタイム」または「交換タイム」を設定している。

隣同士、グループ内でも笑顔が良く見られるが、特に、席を離れた自由な交換タイムのときの子どもたちは、どの子も笑顔であり、自分たちの好きなところに陣取って、横並びや向かい合わせで座ったり、数人で交換を始めたりするなど、非常に和やかな

時間の流れを感じた。和気藹々とはこのことではないかと感じる。交換することで、自分を知ってもらえる喜びと友達のことを知る喜びがこの笑顔の元になっているように感じる。また、友達に書いてもらうコメントの内容も、「良いところ探し」が前提となっているので、安心感もあるのではないかと感じていた。



写真 1



写真 2

(3)大学生のノートにコメント

今年度の後期より、相山女学園大学で「理科の指導法」の授業を行っている。大学の授業では、学生に1時間ごとに内容や感想を書くように指示をしている。授業の終わりにそれを提出して教室を出ることにした。提出された授業のノートに、小学生に対して行っているようなコメント、さらにスタンプを押したりシールを貼ったりして返却するようにした。ここでも、返却をすると、まずスタンプ・シールに目をやり、コメントを読む学生の姿が見られた。シールを貼り忘れると「今回シールがない」という苦情も出た。

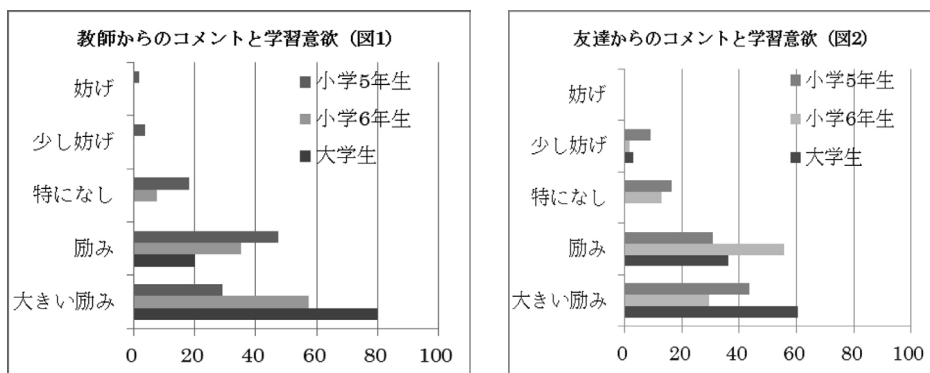
(4)小学生と大学生の差

そこで、小学生と大学生はコメントに対して、どれほどの意識の違い、または共通性があるのかを調べてみようと思い、アンケートを行った。その結果をグラフに示したものが次の(図1)～(図6)である。

2. アンケート結果

(1)コメントと学習意欲

コメントの有無によって、学習に対する意欲がどう変わるかを質問した。教師からのコメントと友達からのコメントについて分けて質問をした。小学生も大学生も傾向は同じであったが、細かく見ると年齢によるものか、日頃のコメントの有無、頻度、量の違いによるものか差が見られた。



(図1)の「教師からのコメントと学習意欲」については、常日頃、小学生は、担任や教科担当からコメント文をもらっている。それに比べ大学生は最近あまり教師からのコメント文をもらっていない学生が多いようである。その差も考えられるが、年齢が高くなるほど言葉に対する意識が強くなっていることも考えられる。言葉に対する意識の強さは、あとの評価の種類についてのときにも表れる。

また、(図2)の「友達からのコメントと学習意欲」に関しては、全体に教師のコメントに比べ低くなっている。「大きな励み」を5に、「妨げ」を1にみて、5段階に数値化して平均を算出すると次の表のようになる。ここで5年生は、教師よりも友達からのコメントをわずかが高く評価していることがわかる。

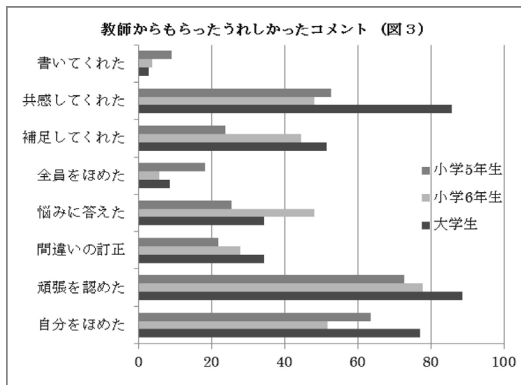
	大学生	小学6年生	小学5年生
教師からのコメントと学習意欲	4.8	4.5	4.0
友達からのコメントと学習意欲	4.5	4.1	4.1

実は、この5年生は、昨年度4年生のときに私が担任をして、他の学年に比べ、友達からのコメントをもらう機会が多くある学年である。中でも、「少し妨げ」の回答も他よりも多くあり、友達との交換が、すべて良いということではないのかもしれない。

一昨年は、6年生の担任をしていた。そのときには一月に1回ほど「句会」を開き、誰の作った俳句かわからないようにして、俳句だけを子どもたちに提示して、お気に入りの俳句を選び、その俳句を選んだ理由を書いてもらった。それを集計して、優秀句を選出していた。そのときには、子ども同士の交流はあるのだが、誰の俳句かわからないということがある。俳句そのものだけからお気に入りを選ぶ必要があった。誰の俳句かわからないけど、お気に入りを選び、コメントを書く。そこで、普段はあまり話をしない子の俳句を選ぶこと、さらに気が合わない子の俳句を選ぶこともありえる。自分の作った俳句をお気に入りを選んでくれることで、友達のこれまでと違う一面を垣間見ることもあった。

(2) 教師からのうれしかったコメント

次に教師からのコメントの内容で、子どもや学生がうれしいと感じたものは、(図3)のグラフのようになっていた。



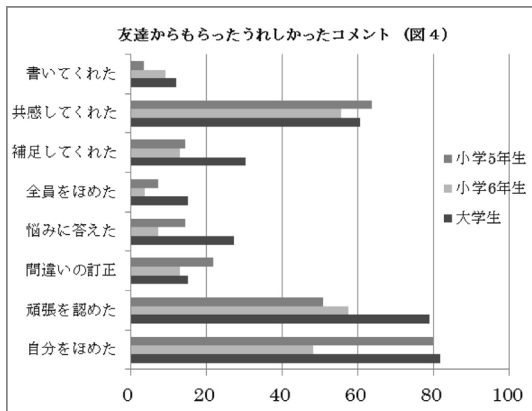
ここで小学生と大学生で大きな違いが現れたところが「共感してくれた」という項目である。「共感」という言葉の意味については、小学生でも理解できている。一昨年の6年生の句会で、お気に入りを選ぶ理由によく使われていた言葉である。教師に共感を求めることは、自身が大人の仲間という意識がはたらいっているのであろう。ただ、子どもであっても、教

師から共感を得ることは、認められたことにつながるので「頑張りを認めてくれた」「自分をほめてくれた」に次いで高い割合になっている。

学習の内容に直接的に関わるのが、「たりないところを補足してくれた」「間違いを訂正してくれた」「頑張りを認めてくれた」の項目である。うれしさの割合の高い・低いという違いはあるが、この3項目は、大学生、小学6年生、小学5年生の順になっている。ここでも、大学生の言葉(学習)に対する正確さ、意識の高さが表れているように感じる。

「理科の指導法」の授業中で、漢字や言葉の使い方について細かなところまで意識がはたらいっている。模擬授業の中での授業者からのふりかえりにも、授業を受けていた学生からのふりかえりにも頻繁に、漢字や言葉についてのコメントが出される。

(3) 友達からのうれしかったコメント



友達からのコメントでは、共感の項目が、大学生も小学生も60%前後ではほぼ同じ割合の回答になった。これは、同じ年齢の友達から共感されることを大切に感じていることが、予想できる(図4)。

ここでも、5年生は前述のように交換をし、コメントをしようことに慣れている様子が伺える。「書いてくれた」だけでは

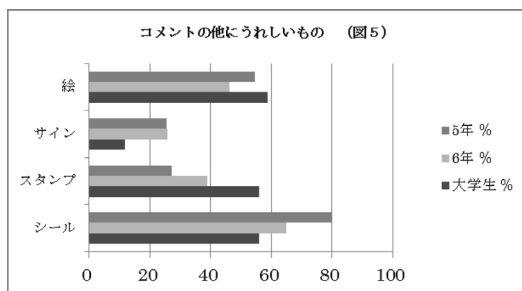
満足できず、「間違いを訂正してくれた」「悩みに答えてくれた」など交流が深くないとできない部分で、ほんのわずかではあるが6年生よりも割合が高くなっている。

6年生は、「友達からのうれしかったコメント」では、教師のところに比べ選択する項目数が少なかったことがある。6年生は教師のコメントを受けることが多くあり、子ども同士の「交換タイム」や「コメントタイム」が少ないことも考えられる。

ただ、単純に「自分を褒めてくれた」というのは、教師からのコメントでも、友達からのコメントでも高い割合になっている。

(4)コメントとその他

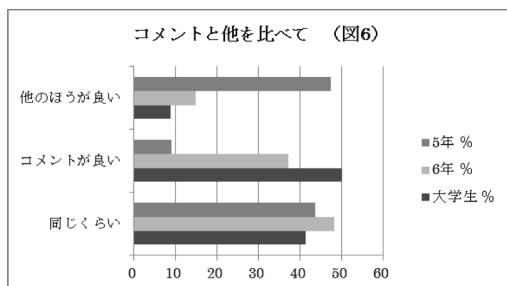
コメントは評価につながり、とても気になるものである。ただ、コメント以外の評価も大きな影響があるのではと考えた。大学生のノートにも、コメントに合わせてスタンプやシールをつけて返却していた。コメントの文以外では何がうれしいかも質問した（複数回答あり）。その結果が（図5）のグラフのようである。



大学生では、シール、スタンプ、絵にほとんど変わらない。しかし小学生は特にシールに関心が高く、続いて絵、スタンプの順になっている。小学生がシールをうれしく感じるのは、特に「梶ニコちゃん」のシールである。「梶ニコちゃん」は、3年ほど前に児童から募集して作られた小学校のマスコット

トシンボルである。昨年度から学校で「梶ニコちゃんシール」を作り、児童の作品やテストにご褒美シールとして使っている。「梶ニコちゃんシール」を貼って返却すると、すぐにはがして、別のところへ大事に貼りなおしている子も何人か見られる。

コメント文とその他のものについて比べる質問では、（図6）のようになった。「同じくらい」という回答にはあまり差がないが、「コメントが良い」と答えているのは大学生に高く、「他のほう（シール、絵など）のほうが良い」と答えているのは小学生のほうが高い。



前述の「梶ニコちゃんシール」のように小学校のマスコットとして大切にしたいという気持ちの表れと見ることもできる。また、大学生の方が言語表現への関心が高く、小学生の方が絵画・図表現に関心が高いことも考えられる。

「梶ニコちゃん」を自分たちで

つくり上げたことや、シールになって身近に「椋ニコちゃん」があるという小学校の特別な事情もあるかもしれないが、総じて子どもたちの絵画・図に関する興味は高いようである。それが評価の際のうれしさの差にも表れてくるようである。

3. 考察

最近では、お互いを褒めあうアクティビティをよく耳にしたり目にしたりする。実際、夏の講習会では自分自身もそのようなアクティビティに参加した。大人でも「褒められたい」という気持ちはある。また、褒めることで脳の血流が増えるという話も良く聞く。それも、褒められた人だけでなく褒めている人も増えると聞く。

ここでは、「カウンセリングマインド」の観点から、コメント文について考察をしていく。ロジャーズ (Rogers, C. R.) は、「クライアントを無条件に受容し、尊重することによってクライアントが自分自身を受容し、尊重することを促すのである。」とした。また、セラピスト側の態度の条件として、自己一致または純粋性、無条件の肯定的配慮、共感的理解ⁱの三つがあげられている。この点は、コメント文でも是非、参考にすべき部分である。

日記、授業のノート、ポスターなどのコメントでは、まず正解・不正解で区別するのではなく、まず全て肯定をする、そして共感をするのが、子どもの自尊感情を支えることになると感じる。「自分を褒めた」「頑張りを認めた」「共感してくれた」コメント文をうれしいと感じる割合が小学生も大学生も高くなる理由は、この受容に通じるからである。

今年の夏は教員免許状の更新講習の中で特別支援教育が特別ではなく、一般の教科指導でも、非常に参考になることを確認した。例えばバリアフリーの構造が普通の人の行動・活動も楽にしてくれるようになっているのと同じように感じる。「できないことを毎日叱られて自尊感情を失わせてしまうより、よいところ、例えば豊かな発想や活発さを認められるほうがその児童を成長させるのである。」ⁱⁱと書かれている。誰しも認められたいことに変わりはない。自尊感情を育てるには、「間違いを直す」コメントよりも、「足りないところを補足する」コメントよりも「褒める」「認める」「共感」するコメントが望まれることは間違いない。

ただ、子どもの世界でも何かといさかや行き違いがある。批判ではなく非難をしてしまう子どももいるし、マイナス思考に走ってしまう場合も考えられる。そんな場合にもまずは、共感から始まる必要がある。「『感情』は理解するが、『行動』は認めない。これが母性原理を基盤とした父性原理の具現化」ⁱⁱⁱとある。マイナスの感情も理解しつつ、視点を変えることやポジティブなことがらを取り上げることも大切な側面になる。これが「間違いを直す」コメントや「足りないところを補足する」コメントとなる。その前提には必ず受容することが必要になる。単に「ここは〇〇ですよ」「ここに□□を付け加えると……」だけのコメントでなく、「そうだね」「なるほ

ど」などの言葉があるかないでは、子どもの受け取り方が違ってくる。受容があつてからの訂正や補足であれば、それがうれしいコメントになる可能性が大きい。

まず受容から入ることで「誰からも存在を認められ安心して学び合える環境こそが、これほど子どもたちの心身を柔らかにし細やかにするのである。」^{iv}となる。特にコメント文は後々まで残り、うれしければ何回も読み返す可能性もある。受容から入ることで、間違いの指摘も素直に受け止められるようになる。そんな安心感が場を和やかにし、リラックスした状態での学習が進めることができるようになる。「場が和やかになるとお互いに受け入れようとして、そこで新しいことが始まり」^v、教師対子どもの関わり方も子ども対子どもの関わり方も非常に和やかで協同的になる。

主に文章のコメントによる学習意欲との関わり方の考察と考えてきたが、最終的には、「学校が子どもにとっても教師にとっても豊かな成長の場であるよう環境づくりに取り組んでいる。」^{vi}という結果になった。

日常の言葉によるコメントの大切さ、さらに表情や態度の大切さも理解をしている。それに加えて、文章によるコメントは手間がかかるが、これまでくり返してきたように後々まで残るものである。卒業生で、大人になって何かの時に日記を読み返し、後に出会ったときに「そういえば……」と、日記のコメント文について感想をくれた卒業生もいる。この文章を書く中で、コメントの持つ教育的な効果を再確認した。

■註

- i 会沢信彦「マインドとしてのカウンセリング、スキルとしてのカウンセリング」児童心理 2011. 8月号臨時増刊号（金子書房）
- ii 樋口一宗「障害のある児童の学習上、生活上の困難とは」知る・わかる・すすめる特別支援教育③初等教育資料 2012. 6月号（東洋館出版社）
- iii 金山健一「どんな子どもに対してもカウンセリングマインドは必要なのか」児童心理 2011. 8月号臨時増刊号（金子書房）
- iv 佐藤 学「学校見聞録」総合教育技術 2012. 3月号（小学館）
- v 宮田良平「教育は双方向」巻頭言・子どもと教育初等教育資料 2012. 6月号（東洋館出版社）
- vi 中原良恵「カウンセリングマインドと教師の成長」児童心理 2011. 8月号臨時増刊号（金子書房）

■参考文献

- 大竹直子「子どもの気持ちに寄り添うカウンセリングマインド」児童心理 2011. 8月号臨時増刊号（金子書房）
- さかなクン「多様性があることは素晴らしい」初等教育資料 2012. 6月号（東洋館出版社）
- 寺島実郎「長い導線としての教育を」巻頭言・子どもと教育初等教育資料 2012. 7月号（東洋館出版社）
- あまきみこ「物語に込めた思い」初等教育資料 2012. 7月号（東洋館出版社）
- 青木 保「生きる喜びを感じる教育を」巻頭言・子どもと教育初等教育資料 2012. 12月号（東洋館出版社）
- 田代幸代「見る見られる関係の中で育つ」初等教育資料 2012. 12月号（東洋館出版社）